

ハルカゼ

春の風が扉をノックする。桜舞い散る春の日だ。
ついにこの日がやってきた。

僕は今日から大学生だ。長い休みは惜しいけれど、新たな旅立ちに自然と気持ちも高揚する。

きつと華々しい一日になる。高校まで大人しかった僕だつて、これからは生まれ変わるんだ。

まず、メガネをコンタクトに変えた。凄く痛むけれど、頑張つて着けてみた。

ファッションにだつて手を出してみた。ちよつと高い服を買うとき、何か物悲しさを感じながらも。

髪の毛は染めなかったけれど、ちよつとだけセットもしてみた。髪の毛がふわふわしていて、違和感たつぷりだけど。

今日の天気は晴れのち雨。まだ空は澄み切っているけれど、そのうちこの空も濁ってくるだろう。

快晴の空に、恵みの雨。一石二鳥みたいな天気だと、いいように捉えることにしよう。

「涼くん、急ぎなよー。電車まであと十分だよ？ 大丈夫？」

母は心配性で、朝になればいつもそう言う。用意は終わっているのだから、もう電車に乗るだけだ。

余裕をもつて、到着は入学式の開始の四十分前にしている。何よりこの家から駅までは徒歩三分なのだ。

「大丈夫だよ、母さん。それより、母さんも仕事があるでしょ？ 僕の心配はいいから、母さんは自分の心配をしてよ」

僕がそう声をかけると、母は感動したような面持ちで、「涼くんもう大学生なんだねえ……」と呟いた。

「いつまでも話してる時間は無さそうだし、そろそろ行かないと」

僕はそう言つて、少し片付いた部屋の布団から立ち上がった。

玄関の傘立てから傘を抜き取り、悩んだ後それを仕舞う。入学式で、傘の置き場所が無かつたらどうしようと思ったのだ。

代わりに部屋に戻つて、折りたたみ傘を取る。昨日、片付けをしている時に見つけたものだ。

「母さん、今日は雨降るんだよね？」

「そうねー、ちよつと待っててー」

時間が無いと言っていたのに、母さんはゆつくりとリビングに向かってテレビをつける。

「うん、十五時から五十%だね。一応折りたたみ持っていたほうがいいよー」

僕は靴を履きながら、アピールするように折りたたみ傘を見せる。母は納得したように、僕の様子を見る。

「じゃ、行ってくるね」

「はい、行つてらっしゃい。気をつけてねー」

僕は後ろに手を振りながら歩く。母は僕が見えなくなるまで、手を振っていた。

僕は電車に乗り込んで、四人席の窓際に座る。

僕の家から大学まで、一時間三十分ぐらいかかる。七時五十分に乗ったから、九時二〇分ぐらいに着く予定だ。

少しゆっくりしていると、たくさん人が乗ってくる。

四月一日だけあって、同じくらいの年齢のスーツの子がいっぱいいる。みんな落ち着かない様子で、立って忙しく動いている子、何度も手をさする子。色んな人がいる。きつと緊張もあるんだろうけど、僕も初めて着るスーツは少し着苦しい。

そうこうしているうちに、席の反対側にペアが座る。二人とも、同じ年ぐらいの女の子。入学式か入社式かはわからないけれど、スーツを着ている。

楽しそうな表情に、思わず笑顔を漏らす。別に期待しているわけじゃないけど、こういう時は何か起こらないかなと思ってしまう。

これからだって何度もあることだろうけど、この門出だからこそそう思ってしまうのだろう。

僕の目の前に座る女の子は、ロングの黒髪だった。時折手で髪をかき上げる。この動作は、まるで一つの完成された芸術品のようだった。

しかし、案の定話しかける勇氣もない僕は、外の景色を眺めながら時を過ごす。女の子たちは僕のこととはどこ吹く風、楽しそうに談笑している。僕はそれを見ながら、くせで手を口元で擦りあわせていた。

空に少し黒い雲が見えてきて、あんまり恵みの雨じゃないなとか思いながら、

『まもなく、陸堂、陸堂です。出口は左側です。陸堂筋線は乗り換えです。開くドアにご注意ください』

乗り換えの駅のアナウンスに、僕は荷物を持ちあげる。持ち上げるとき、少し女の子に荷物がぶつかった。消え入りそうな声ですみませんと言った僕は、早々と立ち上がって降車する。

降車した後、車内を見て女の子のペアがいらないことを確認する。もしかしたら同じ大学なのかな、という少しの希望に、少しの嬉しさを感じていた。

乗り換えると、今度は五人席のご真ん中に座る。僕としてはすぐく勇氣がいることだったのだけれど、出会いに飢えているようでなんだか悲しい。

でも、そこで横に座ってきたのはゴリラみたいな風貌の男の人だった。年齢はわからないけど、スーツだから同い年なのかもしれない。

僕は出来るだけ避けながら体を傾けると、その男は顔を下に向けて眠りだした。寝言で何やらゴニャゴニャと言っているが聞きたくもない。

しかし、眠ったと思って安心したのも束の間で、今度はこちらに傾きだす。あつちに傾いてよ、というか野生の匂いにするよ……と思いつながら、当然僕に起こす勇氣はない。

そこから一〇分ほどの格闘と葛藤がありながら、案外途中で慣れてきて、適度にリラックスできた。リラックスしすぎて、次第に意識も薄れていった。

『次はー、青雲、青雲です。出口は右側です。青雲大学へお越しの方は、次でお降りください。』

アナウンスを聞き、ハッと目を覚ます。少しだけ眠っていたようだ。目を擦って、激痛が走る。コンタクトだったことを忘れていた。降りるのは次の駅だから、ぐずぐずと涙を流してもいられない。とりあえず荷物を持って、目を交互に開きながら降車し駅のホームの端へ行く。そして、大して効果はないのだけれど目薬を差して、なんとか目を開けて歩き出す。

見上げると空はついに青を失くして、一面、白の雲に変わっていた。

入学式の会場に入ると、すでに半数ほどの席が埋まっていた。あまり良くはない気候だったから、会場は少し湿気っぽく心地よくはない。

少しの段差に気を付けながら、流れるように座る人たちに同期して、リズムを崩さないように座る。

両隣に座ったのは、茶髪のいかにも僕が好かないタイプの人だった。座っていきなり女の子に話しかけたり、一緒に来ていた男子と大きな声で話し出す。

座ったところから全体を眺めていると、地毛の色をしているのは半分ぐらいだろうか。

面倒な状況にのまれたくないので、寝たふりをして時を待つ。たまに目覚めたふりをして、携帯の画面を見つめたりしながら時間を過ごす。将棋でいえば、桂の高跳び歩の餌食だ。

桂馬は桂馬らしく、動けるときに動けばいい。

入学式が始まり、偉そうな人たちが壇上に立って話をする。そのの繰り返しに面白味はないのだけれど、時間が経つのが遅いとは思ふことなく入学式は終幕した。

段々と静けさを取り戻す会場を抜け出したのは、式が終わってから3分程度後だった。

すぐに出来ると思っていたのだが、混雑を避けるために入口に近い人から退室する。

会場からはけて外に出ると、足元に花柄のレースの付いたハンカチが飛んでくる。たぶん、風で飛んでしまったのだろう。僕はそれをスーツの胸ポケットにしまいこんだ。

空は一面に黒を蓄えていた。風も雨も強い中で、とりあえず僕は折り畳み傘を取り出す。そして開こうとしたのだが。

「あれ……開かないな……」

そう、傘は開かなかった。考え直してみれば、昨日片付けで久しぶりに見つけた傘だ。開かなくても無理はない。

僕が困った顔をしていると、一人の女の子が髪を揺らしながら近づいてくる。

「あの、朝の電車でした人ですよ？　どうかしたんですか？」

彼女は僕のことを偶然にも覚えていたようで感動する。感動した反動で、コンタクトの痛みが一層増して少し涙が出る。

僕は言葉を選びつつ、少しでも面白いことでも言おうとする。

「いやあ、昔失くした傘が昨日見つかって、それを今日持ってきたんですけど、開かないみたいで……」

特に面白いことも言えず、事実をそのままに伝える。そうすると彼女は、少しクスツとして僕を見る。

「私、心配性で。今日は二つ傘を持ってきたんですよ。よかつたら使いませんか？」

僕は緊張していて、口元で手を擦る。その時、ラベンダーの香りを強く感じた。

「あ、ありがとうございます。でも、いいんですか？」

「いえいえ、気にしないでください。よく会いますし、何か縁があるのかもしれないですね。よかつたら、駅まで一緒に行きませんか？」

願ってもないような提案で、僕はそれを了解した。僕は彼女から折り畳み傘を受け取り、優しく開く。

「そういえば、友達と一緒にだったんじゃないか……」

思い出してみれば、彼女は友達といたはずだった。いないということは、何かの理由で別行動になったのだろうか。

「いえ、彼女は違う大学なんです。だから、途中までっ、です」

彼女も傘を開き、「じゃあ、行きましょうか」と言って歩き出す。僕も強い風に揺られる彼女の髪を見て、整えてきた髪を少し気にしながら歩き始める。

風の音も雨の音も激しく、雑音に塗れていたが、彼女の声だけ澄んで聞こえた。おそらく、僕が耳を凝らして聞いていたからだろう。

「そういえば、名前、聞いてなかったね。良かつたら教えてくれないかな？」

僕が押し黙っていると、彼女の方から聞いてくれた。彼女の方は慣れてきたようで、少しずつ敬語も薄れてきた。しかし、こういうことは男の僕が聞くべきなのだろうが、そんな勇気はなかった。

「ナルセリヨウです。成功の成に、浅瀬の瀬。涼しげの涼で成瀬涼です」

僕が早口に答える。どうも親しげを込めた紹介ができない。これではサラリーマンの自己紹介となんら変わらない。僕の紹介を聞いた彼女は、クスツと嫌味なく笑っていた。

「えーと、私はヤマモトエリです。普通の山本に、えっと、絵画の絵と……里芋の里？ そんな紹介したことないから難しいな」

彼女は終始笑顔を絶やさず、僕も自然に笑顔になる。

そして僕は完全に受け手になって、彼女の言葉を待っているだけだった。

「今日は入学式だけだったけど、明日から大学だよ。成瀬くんは何学部なの？」

「僕は文学部です。小説が好きだったから、近くの大学で調べたらここに……」

彼女が突っ込みやすいように、できるだけ情報量を厚くしようとする。しかし、あまり出来ず、語尾も委縮していつてしまった。

「わあ、私も文学部なんだ。私も小説が好きで、話し相手がほしいと思ってたの。嬉しいなあ。前の高校だと、携帯小説とかライトノベルとかの話ばかりでなんだかやりにくかったんだ」

「山本さんもそうなんだ。僕もそんな感じだったから。あ、でも文学部だからそういう人が多いんじゃないかな？」

「そうなのかな？ そうだといいなあ。あ、もう駄だね。とりあえず、傘直そっか」

彼女は手際よく傘を下して閉じ、仕舞いこんだ。僕も続けてゆつくりと閉じ、丁寧にたたんだ。

彼女は少し濡れたスーツを気にしながら、少し慌てた表情をする。「どこにやったんだろうなあ……」と不安そうに呟く彼女を見ながら、少し僕には心当たりがあった。

「もしかして、ハンカチ失くした？ 僕、さっき会場のところで拾ったけど」

そう言っ僕はハンカチを差し出すと、ほのかにラベンダーの香りがする。彼女はふつと安心したようにこちらを見る。

「よかったあ、それ、お母さんのなんだ。今日は門出の日だからって、昨日貸してくれたの。でも、なんでわかったの？」

香水の香りで気づいたと言うとなんだか恥ずかしい気がして、言葉を飲み込む。その代わりに、なんとなく、と答えた。そして僕はハンカチを差し出し、彼女はそれを受け取って抱きしめる。

「ありがとね、成瀬くんといなかったらハンカチ探しに行くところだったなあ」

僕は恥ずかしいのでただ頷いた。その時の彼女の笑顔は、コンタクトの痛みの涙で滲んだ僕の目でも、これまで見た誰より輝いて見えた。

言葉少なに改札をくぐり、ホームに入ってきた電車の車窓に映る自分を見て、セツとした髪を嘆く。しかし、少し悪天候に感謝する。この出会いも、「それ」のおかげだ。

今日の不思議な巡り合わせに、内心も穏やかではない。新しい自分が、新しい未来が始まっているような気がした。出会いの季節に相応しい春の風が、僕たちを歓迎するように

二人の髪を揺らした。